

〈資料紹介〉  
仏像彫刻

津波古聰  
(沖縄県立博物館)

<Material Note>  
Notes on Some Wooden Statues, Called BUTSUZOU,  
in Okinawa Prefectural Museum

Satoshi TSUHAKO  
(Okinawa Prefectural Museum)

当館に収蔵されている仏像彫刻は、戦後すぐに円覚寺やその周辺から採取された建造物の装飾品や仏像の断片類である。これら木彫類は破損・剥離・虫食いなどがひどく、完全な状態の像は一体もないが、琉球屈指の古刹であった円覚寺の本尊・釈迦三尊や山門楼上に安置されていた十六羅漢像などがある。この釈迦三尊や十六羅漢像は、安置した年や場所が明らかであり、しかも釈迦三尊については、胎内に作者と製作年が墨書きで記されている。これら仏像類は円覚寺の歴史はもとより広い意味で、琉球の仏教史や彫刻史を知るうえで貴重な資料と思われる。今回、木彫類のなかから仏像を抜き出して紹介したい。

円覚寺は、1492年に着工し、3年後の1495年に竣工。尚円王を祀るために建設した寺で、臨済宗の沖縄における総本山である。敷地面積1080坪あったと言われ（明治六年、大蔵省調べの『琉球藩雜記録』より）、1933年に国宝に指定され、今次大戦による破壊損失するまで整然とした寺規が守られていた。

破損前の円覚寺の仏像については、大正から昭和の初期にかけて、沖縄の歴史・美術工芸を調査し、写真撮影した鎌倉芳太郎の著書『沖縄文化の遺宝』に各寺社の仏像とともに紹介されている。そのなかに円覚寺仏殿の須弥壇全景や山門樓閣上の観音菩薩と十六羅漢像の一部が見える。須弥壇には釈迦三尊があり、蓮座に座る中尊・釈迦如来を中央に、左右の脇侍である文殊・普賢菩薩を配す。三尊とも頭光・身光のある光背を持つ。像容は、

宝髻冠を頂き、通肩の納衣を着け、右脚を上にした結跏趺座である。文殊・普賢とともに右脚がみえるが、釈迦如来は納衣の一部に脚がかくれており見えない。須弥壇の壁には金剛会図が描かれていたが、1697年改めて描かれ、彩色も施された。それとともに、普菴禪師の画像が掛けられたという。この板絵は、琥自謙・石嶺傳莫の手によるものと言われるが、描き直されたものではなく、古い絵の上からなぞるように筆を走らせたようだ。比嘉朝健は、その著書『琉球の肖像画と其進展』（『塔影12巻12号』昭和11年）に新旧ふたつの筆の痕があったことを報告している。

琥自謙が金剛会図を重修した前年（1696）に山門楼上にあった損傷の激しい仏像を荒神堂に納め、新たに福州より観音菩薩と十六羅漢像をもとめ奉安する。これら像は、菩薩を中心とし、その左右に羅漢像が配置された。（『球陽』No.603、『琉球国由来記』安配諸像事の項P192）

今回紹介する仏像は、一材から丸彫りする一木造りと別材を矧合わせて造る寄木造りとに大きく分けられる。大半が一木造りで、寄木造りは釈迦三尊と土地神のみに見られる。もっとも今回紹介できなかった文殊・普賢菩薩の獅子や象も寄木造であり、県指定の「白象」もこの技法で造られている。材質は檜材と思われるものと広葉樹系の堅木が使用されているようだ。彩色は漆塗りの上に金箔や金泥が施され、納衣などには、青・青緑・朱などの顔料を用いて模様を描いてある。しかし、顔料は風化が甚だしく、僅かに付着している状態である。

多くの仏像は、前に記述したもののはかに、如来、観音、天部、達磨など名称及び安置した年月日が不明なものが多い。さらに、当館所蔵のこれら仏像類もすべてが円覚寺にあったものかどうか明らかではない。幸いにも一部の仏像が写真という形で残されており、その所在は確認できるが、天尊廟の「下天妃御側立象」のように他の寺社のものも混ざっている可能性も考えられる。

調書は『沖縄県下の仏像彫刻調査記録報告』（西川杏太郎著 昭和48年）をもとに破損・亡失前の像容については、『沖縄文化の遺宝』（鎌倉芳太郎著 昭和52年 岩波書店）を参考し、それに拙者の調査結果を加えた。彩色については、青・青緑・朱・墨など見た目の色のみを記した。

## 釈迦如来座像

〔法量〕 像高・33.7 像奥行・36.0 像幅・35.0

〔造り〕 寄木造 〔材質〕 檜材か? 〔作者〕 吉野右京

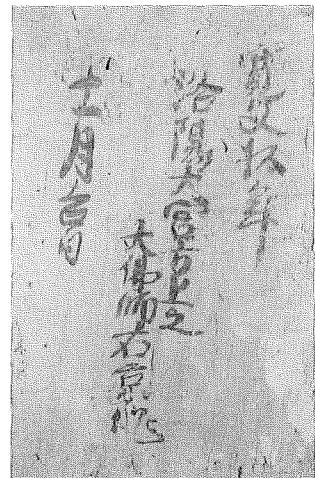
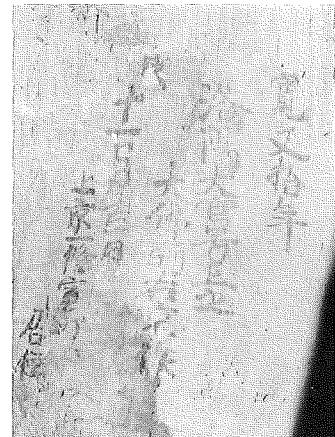
〔下地〕 不明

〔彩色〕 漆塗りに金箔

〔概要〕 円覚寺の仏殿須弥壇上の釈迦三尊の誕生仏にあたる釈迦如来座像で、文殊普賢両菩薩を脇侍におく。頭部、両手、光背はなく、その他の装飾品も失う。この像は、両脇侍と同じく漆箔の結跏像である。

破損前の姿は、文殊普賢菩薩と同様に光背や天冠・胸飾りなどが見られる。また、宝髻や天冠をいだき、一段と大きな光背をもっていた。前面と背面の胎内に下記写真のとおりの墨書による銘がある。

(写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P72 No.97)



## 普賢菩薩騎象像

〔法量〕 像高・18.7 像奥行・20.6 像幅・22.6

〔造り〕 寄木造 〔材質〕 檜材か? 〔作者〕 吉野右京

〔下地〕 不明

〔彩色〕 漆塗りに金箔

〔概要〕 円覚寺の仏殿須弥壇上の釈迦三尊のひとつ。釈迦如來の右脇侍で、象に乗る。

象は、頭部と尾を失うが、残りは現存する。右足を外に外して座る漆箔の結跏像である。

破損前の姿は、蓮座のまま象に乗り、光背を持つ。それらすべてを失い、さらに頭部と右手首もなくす。両脇部に真鍮製の釘が残されており、おそらく胸飾りをとりつけたものと思われる。像の躰分は、胸と背に豎割りで矧付け、両肩から裾まで一材にて躰に付ける。両膝は横一材を用いている。これら材は内割りが施されており、前面と背面の内に墨書きにより下記のとおり銘がある。

(写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P72 No.97)

〔銘〕 墨書き「寛文十年

十一月吉日

洛陽大宮方上之

大佛師吉□右京作」



## 文殊菩薩騎獅像

〔法量〕 像高・25.8 像奥行・18.8 像幅・23.6

頭頂～頸・8.5 面幅・5.6 面奥・5.7

〔造り〕 寄木造 〔材質〕 檜材か？ 〔作者〕 吉野右京

〔下地〕 不明

〔彩色〕 漆塗りに金箔 宝髻・青緑、天冠台・金箔

〔概要〕 円覚寺の仏殿須弥壇上の釈迦三尊のひとつで、左足をはずして座る漆箔の結跏像である。釈迦如来の左脇侍で、獅子の像に乗る。獅子は、現在6片ほど残り、各部分に剝がされている。

破損前の姿は、普賢菩薩騎象像と同じく光背をもつが、すべてを失う。さらに後頭部と左肩から手の部分ををなくす。像の造りは普賢菩薩と同じで、その構造が破損した部分より確認できる。また、後頭部がなく、頭部内が露出しているため、「玉眼」の構造が観察できる。胸には真鍮製と思われる胸飾りがあり、右脇のみで止められている。頭に穴が2つほどあり、宝冠を取りつけた痕と思われる。胎内の前面に下記のとおり墨書の銘がある。

(写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P72 No.97)

〔銘〕 墨書「寛文十年

洛陽大宮方上之

大佛師吉野右京作」

十一月吉日



頭部内「玉眼」部分



## 感應使者

〔法量〕 像高・32.0 像奥行・11.4 像幅・26.2

頭頂～頸・12.1 面幅・8.2 面奥・9.3

〔造り〕 寄木造 〔材質〕 檜材か? 〔作者〕 不詳

〔下地〕 泥のようなものに墨を塗り、そのうえに胡粉が見える。

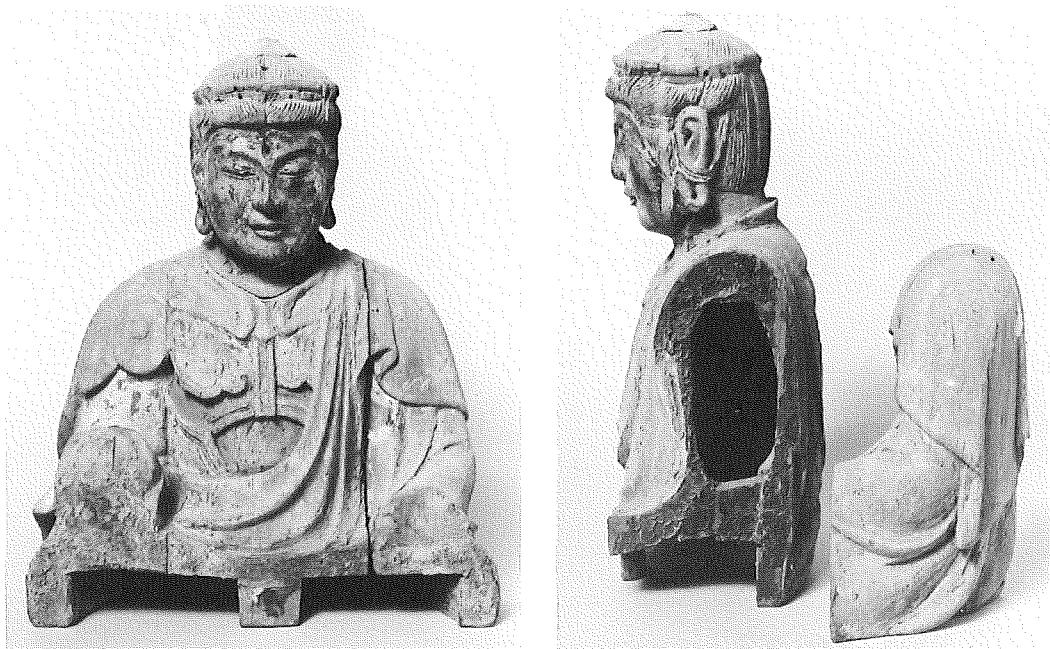
〔彩色〕 肉身・金箔、宝髻・青緑に青、天冠台・朱、肩甲と胸甲の一部・青緑 腹・朱、納衣・青と青緑、納衣裏・朱

〔概要〕 円覚寺仏殿の東南隅壇上にあった土地神のひとつ。額中央に一眼を持つ三目。

水晶（あるいはガラス）に赤丸と黒丸を入れ、瞳とするいわゆる「玉眼嵌入」。もともと椅子に腰掛けた奇像で、左手は腰方向に差し出していた。両膝部分が一枚板で現存するが、両手下脇及び椅子部分は亡失す。

頭部は前後より合わせ、頸を軸に差し込む。両肩および軸部は前後より合わせる。ほとんどが別材による矧合わせである。衣は、向かって右肩から左脇に掛けられており、利き腕の右肩は肩甲が露出する。

（名称は『沖縄文化の遺宝』による。写真参照・同文献P95 №122）



## 大帝大權修利菩薩頭部残片及び掌簿判官頭部残片

〔法量〕 大帝大權修利菩薩頭部残片（高18.2×奥行12.6×幅11.0）

掌簿判官頭部残片（高16.0×奥行8.3×幅7.5）

〔造り〕 寄木造 〔材質〕 檜か？ 〔作者〕 不詳

〔下地〕 墨に胡粉か？

〔彩色〕 大帝大權修利菩薩頭部残片～宝冠部・青緑と朱、口内・朱、顔面と首・胡粉

掌簿判官頭部残片～髪部分・青緑、頬から頸にかけて胡粉

〔概要〕 両方とも「仏殿東南隅壇上土地神」の像で、首部と判官の左上を残しすべて失う。先の「感應使者」と一具である。大帝大權修利菩薩が中央にあり、判官は左、使者は右に配する。二体ともに奇像で、曲に座る。菩薩は中国の官服姿であるが、判官は唐装で襟をV字型に合わせ、さらに上から衣を着ける。

菩薩は、鼻先が切られており、眼は彫眼である。右手をかざし、左手は膝におくこの像は、禪宗系寺院の須弥壇脇に置かれる「大元」と思われる。造りは前後の二材に矧ぎ、内割りが施されている。

判官の髪は青緑の顔料が彩色され、宝髪・天冠台をいだき額中央に一眼を持つ三目である。三目ともに「玉眼」と思われるが亡失す。やはり、内割りの前後の二材矧ぎである。

（名称・『沖縄文化の遺宝』による。写真参照・同文献P95 No.122）



大帝大權修利菩薩頭部残片



掌簿判官頭部残片

## 觀音立像

〔法量〕 像高・38.2 像奥行・10.0 像幅・14.0

頭頂～頸・6.1 面幅・4.0 面奥・4.6

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 全体に漆塗りに金箔

〔概要〕 歩こうとする姿をあらわした漆箔の觀音像である。両手がなく、顔面及び宝髻部分と躰の左部分が抉られている。また、背も削られており、所々木肌が露出している。像の底部にはふたつのホゾ穴がある。

もともと円覺寺山門楼上に十六羅漢像とともに安置されていたが、大正～昭和にはすでに両手はなく、半球らしき台座に乗っていた。1696年、十六羅漢とともに中国より請來したもので、この像を中心にして左右に十六羅漢像が配置されていたと言う。両手を失ったためこの像の種類は明らかではないが、頭部の宝髻とそれを被う布の形状より三十三觀音のひとつとも考えられる。

(写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P 63 No.83)



## 十六羅漢像－①

〔法量〕 総高・44.2 像高・34.6 像奥行・10.0 像幅・14.8

頭頂～頸・7.0 面幅・15.0 面奥・8.5

台座（高10.0×奥行18.0×幅25.1）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 肉身・朱、マント・朱と青緑、衣・全体的に朱、マント及び衣の裏・朱 脱・青緑と朱、

〔概要〕 円覚寺山門楼上に安置されていた立像。台座を含み、一材よりの丸彫りで内割りなし。顔料はわずかに残されているが、両腕はない。躰は正面を向いているが、顔は左を向いている。

破損前のこの像は、小動物のうしろ足を両手でつかんでおり、小動物は前足を羅漢の胸と肩におく。同位置に残る突起物は、この小動物の前足と思われる。

（写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P 63 No.18）



## 十六羅漢像一②

〔法量〕 総高・39.8 像高・29.4 像奥行・9.0 像幅・14.2

台座（高9.6×奥行10.1×幅25.2）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

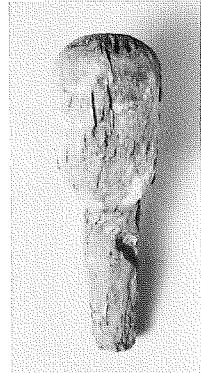
〔下地〕 不明

〔彩色〕 マント及び衣～朱、青緑、胡粉

〔概要〕 円覚寺山門楼上に安置されていた立像。損傷ひどく、首及び両手等を失う。顔料も窪みに埋まるように残されているが、マント部に格子模様が薄く見える。もとの像容は、少しうつむき、左手を小型の天部像の肩に乗せている。この小型の天部像の足が台座上にわずかに残されている。

なお、この像とともに首のみの残欠が置かれてあったが、別ものと思われる。首は眼・鼻・口などの彫りを失い、顔料も胡粉がわずかに見える程度である。頭頂から頸までの長さは7.2cmで、首柄は12cmあり、長く造られている。

（写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P63 №85）



### 十六羅漢像－③

〔法量〕 総高・45.8（首を除く・高38.0） 像高・37.4 像奥行・8.9 像幅・13.8

頭頂～頸・6.9 面幅・4.5 面奥・5.4

台座（高8.3×奥行13.7×幅20.0）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 肉身・朱・袈裟・朱と青緑

〔概要〕 袈裟を着け、背をはいた羅漢像。背面と両手首、及び台座の後ろ部分を失う。

背が大きく割れているため、首の差し口の様子がよく分かる。首は長く、そして深く差し込まれているが、すわりが悪いため、少し軽より浮く。

山門樓上の向って左に位置し、顔は左の方を向いている。彩色は袈裟の部分に残されており、薄く格子状に描かれている。おそらく、格子は金による配色であろう。

（写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P61 №82）



#### 十六羅漢像-④

〔法量〕 総高・38.3 像高・28.7 像奥行・9.0 像幅・14.5

台座 (高9.6×奥行11.5×幅15.3)

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 裳・胡粉に朱

〔概要〕 山門楼上にあった羅漢像で、頭部・両手及び台座のうしろを失っている。首を差し込む穴があることから、頭部は③の羅漢像のように長い首柄を差し込んだものと思われる。また、外套の左襟付近に方形の空間があいている。肩の傾く方向から像は右を向いていたと思われる。外套の内の裳は腰の部分で紐により結ばれており、その結び目が像の正面に見える。

顔料は朱と胡粉が若干残っているが、その他の色を見つけることはできなかった。山門楼上の左右どこに配置されたかは不明。

(写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P61 №82)



## 十六羅漢像-⑤

〔法量〕 像高・34.8 像奥行・10.0 像幅・17.2

頭頂～顎・6.8 面幅・4.1 面奥・5.6

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 外套・朱と青緑

〔概要〕 右手を左側外套の襟の中へ入れ、顔つきだすように右を向いている像で山門楼上の向って左側に配置されていた。現在は右手首・左側外套の一部と足及び台座を失っている。躰前面に彩色された部分はなく、外套の背面に朱と青緑色が確認できる。この青緑色の一部分（断片であるが）にさらに胡粉を塗り、墨による波型の線描がわずかに残されている。

戦前の像容は顔を右側に突き出すように向けており、彩色も衣文にそって大胆に施されていたようだ。

（写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P61 №82）



## 十六羅漢像一⑥

〔法量〕 像高・35.8 像奥行・10.4 像幅・13.0

頭頂～頸・6.7 面幅・4.5 面奥・5.3

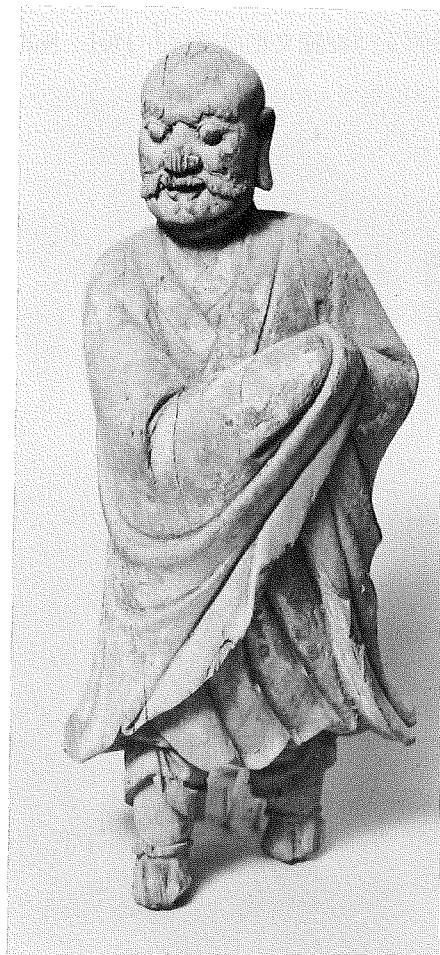
〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 裳・朱と青緑

〔概要〕 台座及び後頭部がなく、口髭をもつ羅漢像。両手を袖のなかにいれ左胸の前で拱手する。部分的ではあるが、胡粉と青緑が多く残されている。もとの像容は、岩座に立ち、足は沓をはき、八の字に開いて立つ。『沖縄文化の遺宝』より、彩色は襟の部分を残して朱となし、裾の部分は青緑の一色のように見える。かつては山門楼上の向って左に配置されていた。

(写真参照：『沖縄文化の遺宝』 P61 No.82)



## 十六羅漢像-⑦

〔法量〕 総高・43.3 像高・33.7 像奥行・9.8 像幅・15.6

頭頂～頸・6.8 面幅・4.5 面奥・6.1

台座（高10.0 奥行13.1×幅23.4）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 裂裟・金箔の格子模様に朱、青緑、青の三色による市松模様

〔概要〕 裂裟を掛けた羅漢像で、八体の像のうち彩色が最も多く残されている。頭頂は皿状に切られているが、これはNo.9の羅漢像のように別材を矧合わせたものと思われる。台座は堅に大きなヒビがあり、底面に楔形のちぎりが見える。像の耳穴は深さ約1.2cmほどあいている。

背の裂裟部分に残された彩色は、金箔の格子模様に朱、青緑、青などの色を使い、市松模様に配色している。それぞれの格子のなかには、花文が異なる色で施されている。この像は、かつての十六羅漢像の彩色を知る上で最も貴重なものと言える。山門楼上の左右どこに配置されたかは不明。



## 十六羅漢像一⑧

〔法量〕 総高・43.6 像高・34.1 像奥行・11.3 像幅・14.8

頭頂～顎・8.0 面幅・5.2 面奥・7.7

台座（高9.6×奥行14.5×幅24.3）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 肉身・胡粉、裳・青、裳の襟・朱、台座・青緑と朱及び胡粉

〔概要〕 布袋の上に立つ笑貌の羅漢像。頭頂は皿状に別材の矧ぎで、内割りはない。二臂はなく、顔料もわずかに残る。肉身の胡粉は、他の顔料の塗装状態から下塗りとして用いられたと考えられる。裳は全体に青色を塗り、天衣のように躰をまわる襟は朱色で、青海波文を施す。裳の襞部分に金箔が残留する。

裸足のこの羅漢像は太鼓腹を強調するからのように表されている。足元の布袋や笑貌など、「布袋像」の特徴をもつ。



## 下天妃御側立像（天尊廟）

〔法量〕 像高・99.0 像奥行・31.8 像幅・35.0

頭頂～頸・21.1 面幅・11.4 面奥・12.7

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 肉身・胡粉、衣・朱、眉・墨書き、冠の後ろ・墨、冠の前面花文・朱

〔概要〕 天妃廟には、下天妃廟と上天妃廟があり、それぞれの神像は廃藩置県後まで、天尊廟内に合祀されていた。昭和3年に、天妃宮を創建し、二神を奉還している。天妃宮内には右に上天妃、左に下天妃の像が祀られている。この像は、倚像の下天妃像の回りに立つ諸像の一つである。

前かがみの像容を見せるこの像は、長い額鬚と耳下よりでた長い鬚をもつ像である。損傷がひどく、材が風化したためか心の部分がスッポリ抜け、まるで、内割りのように見える。両手首及び脇の部分が腐朽しているが、衣の背部分に朱の顔料が残されている。頭部の冠は側面に簪を通した小さな穴があいているが、簪は現存しない。

(名称は『沖縄文化の遺宝』による。写真参照・同文献P137 No.18)



## 如来座像

〔法量〕 像高・30.6 像奥行・11.2 像幅・16.2

頭頂～頸・9.7 面幅・5.4 面奥・6.5

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 全体に漆塗りに金箔、頭部（螺髮）・胡粉に青緑、唇・朱

〔概要〕 頭頂部の一部分は螺髮を失い肉身が露出する。肉髻および螺髮は練り物で、ひと粒づつ貼りつけてある。納衣は両肩を通り、腹の部分で弧を描く。腰の部分に細い紐が見え、前面で結ばれている。

漆塗りの漆箔像で、内割りではなく一材からの丸彫りである。両手両脚はなく、腰部前面に角ホゾがあり、脚部分を差し込んだと思われる。戦前の所在地は不明



## 観音座像－1

〔法量〕 総高・40.2 像高・17.0 像奥行・13.3 像幅・16.4

頭頂～頸・6.3 面幅・2.8 面奥・3.6

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 観音像・蓮～漆に金箔

〔概要〕 右膝を立てて座る漆箔の観音像である。上下と左部分を失う。一材の丸彫りで、台座部分は高浮彫り。特に蓮の花は台座の下にあり、透かし彫りである。像を横から見ると背景の岩窟らしき部分よりかなり前方へ突き出している。また、右膝を立ててあるため、躰は左に傾きぎみになっている。それにともないバランスを取るように、頭部は右に少し傾いている。両手の方向は不明。

納衣は通肩で、髪は結い上げた宝髻あるいは垂髪で、その上に布を被り、後ろに垂らす。観音像の像容から三十三観音のひとつと思われる。



## 觀音座像－2

〔法量〕 総高・18.4 像高・12.8 像奥行・6.4 像幅・8.0

頭頂～顎・4.8 面幅・1.9 面奥・2.7

台座（高6.3×奥行7.8×幅8.8）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 全体に金箔

〔概要〕 本体から角の束心棒まで一材の丸彫り。冠の飾りのうち、正面に化仏像をおく。

冠の左右に蓮花を模したような飾りがあるが、右の飾りはなく、差し込みの穴が見える。背面の下部には光背などを差し込んだと思われるホゾ穴がある。台座下部から背の腰部にいたりヒビがある。戦前の所在地は不明。



## 觀音菩薩座像

〔法量〕 総高・26.6 像高・18.9 像奥行・8.8 像幅・12.9

頭頂～頸・6.3 面幅・2.9 面奥・4.7

台座（高7.7×奥行13.5×幅10.3）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 全体に金箔、台座・朱と青緑

〔概要〕 後頭部左右に小さい面をもつ三面の像で、蓮座上で右足を上にした漆箔の結跏趺座の形をとる。冠は欠損部分が多く、形がはっきりしない。多臂の像容であるが、すべて失っている。したがって像の種類は特定できない。蓮座は蓮華部と框の間に方形の敷茄子が入る。敷茄子の正面に矩形の窓があり、蓮らしき模様が描かれている。像の背は頭部から台座にいたるまで縦にヒビが走っている。その線上に方形の楔らしき部分がある。戦前の所在地は不明。



## 十一面觀音像

〔法量〕 像高・11.8 像奥行・3.5 像幅・7.1

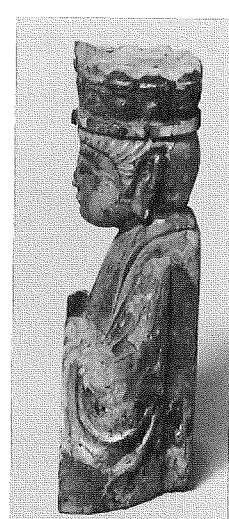
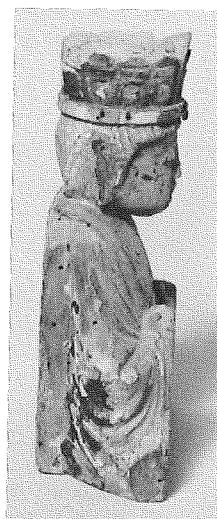
頭頂～頸・5.0 面幅・2.5 面奥・3.3

〔造り〕 一木造 〔材質〕 檜か? 〔作者〕 不詳

〔下地〕 不明

〔彩色〕 全体に金箔で、髪・青

〔概要〕 素朴な觀音像で、首と胴部をのぞき全て失う。横に見える腰部と思われる形状から座像と推測される。宝冠正面は、光背型の中に立像が見え一段高くなっている。その他9個の部分の形は不明。宝冠台中央に白毫があり、黒く見える。像裏面に方形のホゾらしき部分があり、両肩の中ほどまで彫り下げられている。



## 布袋座像

〔法量〕 像高・28.0 像奥行・17.0 像幅・21.0

頭頂～頸・11.1 面幅・6.7 面奥・8.1

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 胡粉

〔彩色〕 全体に金箔か？

〔概要〕 軽量な材で、丸彫りで内削なし。頭部と胴部が現存するが、虫喰いは甚大である。耳たぶにわずかに金箔が残されており、おそらく全体に金箔をほどこしたものと思われる。また、胡粉も若干確認できる。

太鼓腹を突き出した姿は、確かに布袋像であるが、この像が持つ快活な表情はなく、顔面も破損しているためか逆に悲壮感ただよう表情に見える。円覚寺に安置されたと思われるが定かではない。

〔『写真集沖縄・失なわれた文化財と風俗』（昭和59年那覇出版社）P 64. No.57〕



## 達磨座像

〔法量〕 像高・18.0 像奥行・9.7 像幅・13.4

頭頂～頸・6.0 面幅・4.0 面奥・4.7

〔造り〕 一木造 〔材質〕 檜材か？ 〔作者〕 不詳

〔下地〕 白土に漆塗りか？

〔彩色〕 肉身・少量の胡粉、背・朱と青緑が微少あり

〔概要〕 左膝部分と鼻頭が欠損し、塗料系は殆ど剥脱している。頭から衣を被り、両手は膝の上で衣のなかに入る。一材による丸彫りである。後頭部に径1cmほどのくぼみがあり、漆のようなものが塗られている。頭頂はゆるやかな曲面で、ほぼ平らに見える。背は垂直に立ち、正面から見るほど像の厚みはない。全体に三角形をなし、安定性を保つて入る。戦前の所蔵場所は不明。



## 天部型座像

〔法量〕 総高・27.2 像高・21.2 (椅・28.0)

頭頂～頸・6.7 面幅・3.2 面奥・4.2

台座 (高3.5×奥行12.5×幅12.5)

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 下地は胡粉のみか?

〔彩色〕 肉身・朱、服に金箔、踏台・金箔に青色、台座上面・墨か?

台座 (正面枠内)・金箔に青緑色、椅背面・朱色に金箔で、墨により倚子背面に掛けた布の皺模様を描く。

〔概要〕 胡粉を一様に塗り、さらに胡粉で唐草模様を描絵する。そのあと金箔を貼り、胡粉の盛り上がりによって模様を表す。顔料類は風化し、容易に剥奪する。色が若干残されているため、当時の色彩が伺える。

右腕が欠損し、その断面は正面を向いている。沓は台座上面より浮き、外に向く。顔面の縦にヒビがあり、腹部まで続いている。木の種類は不明だが、堅木で台座裏面に鑿の痕が見られる。この像の形は、いわゆる土帝君（土地公）に酷似している。戦前の所在地は不明。



## 天部型立像－1

〔法量〕 総高・39.6 像高・33.3 像奥行・12.2 像幅・15.0

頭頂～頸・7.3 面幅・4.1 面奥・5.0

台座（高6.9×幅20.4×奥行16.5）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 紙着せか？

〔彩色〕 甲冑部分・胡粉に金箔、裳の胸部分・微小ながら青緑の顔料が残存

裳の後および袖部分・朱、台座・胡粉に朱と青緑

〔概要〕 耳の上に翼のような突起物をもつ兜をかぶる。顔面および両手がなく、地に垂れた裳の部分も失う。脊と腰部、甲冑の裾に獸面を施すが、とくに、腰部の獸面は、前方をにらんでいる。雲型の台に立つこの像は、内割りではなく、材質はかなり重量があり、堅い木である。

像は前方へ少し傾いており、それを支えるため、脚はV字型に踏ん張る。両手を失っているため、像の種類は特定できないが、「韋馱天」の可能性も考えられる。

（参照：『琉球国由来記』安配諸像事の項）



## 天部型立像－2

〔法量〕 総高・22.2 像高・18.6 像奥行・6.2 像幅・8.2

頭頂～頸・5.0 面幅・2.7 面奥・3.8

台座（高3.6×奥行7.8×幅3.8）

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 胡粉

〔彩色〕 全体に金箔。顔面・墨、台座・朱、台座正面窓枠・青緑

〔概要〕 腹中央に獸面をもつ甲冑の着た像で、下方を睨みつけるように立っている。表面の加飾は、胡粉を厚めに塗り、その盛り上がりを利用して甲冑の鉢や模様を表している。手法は天部型座像と同じ。

一材による丸彫りで、重量のある堅木。台座裏はノミの痕があり、左腕をなくす。その腕の断面にホゾ穴があり、腕は差し込まれたことが分かる。口元に毛があり、口鬚を持っていたようである。戦前の所在地は不明。



### 天部型立像－3

〔法量〕 総高・21.8 像高・18.6 像奥行・5.3 像幅・8.7

頭頂～頸・4.0 面幅・2.5 面奥・3.6

〔造り〕 一木造 〔材質〕 不明 〔作者〕 不詳

〔下地〕 胡粉のみか？

〔彩色〕 全体に胡粉の上に金箔か？

腹の甲冑の帶部分・青か？、頭巾及び肉身・朱か？

〔概要〕 衣装などの模様は、胡粉を一様に塗り、さらに胡粉で唐草模様を描画する。その後金箔を塗り、胡粉の盛り上がりによって模様を表しており、先の「天部型座像」と同じ技法である。

堅木の丸彫りで、両手両足はない。左足は破損し、像の下部がどういう状態だったか不明である。この像を振ると胎内より音が聞こえ、像の背面に方形の蓋板らしき部分があることから小さく内割りが施されていると思われる。

